



畫案

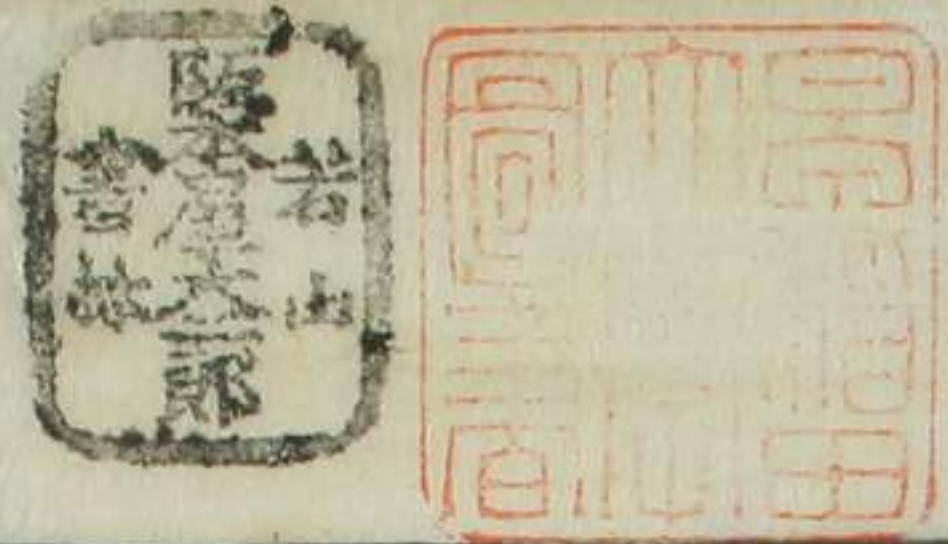
小馬紀

紀

13
1786
5



門へ 13
部 1735
卷 5



第五卷

- 一 借財の地味かりかひのぢまゐ
- 二 美責みせきを以て報むかひ
- 三 鬼おにの目めも洞あな
- 四 八十乃そまゐ手智てぢ
- 五 寝身ねみへ身み



一 信守の地を新海成の國麩與
 天子徳候の御願ふごとく天下は天下
 況士大吏の友徳知の百姓乃是此商
 人の家を安らげ候まじく鼻身亦は
 まして物とてハ一もたなく諸是天
 下り信守行り或人全報は是も
 終持て海との高の地とくの各れ一
 とびあがまの事ハ信守の内トヤハ中
 小及垣はか地合あはれ方でも質と

是れを合するに神の勅の始末の終心
 寝ぐすれ筆をわせとるは振つてを
 是れが力神の代ハ十代ハ家内神て
 てこそ是れまらるとして又あはれと
 舞が親の幸勞する子ハ業す孫ハ食
 す世の習ははどの代ハはは法者世を
 續て何とてハ續けしむる家報は
 むり先て是れ終極て是れと
 白がり内外の通性かこは是れと見

のぐいよなと魚杖つとの下くもかひらき
かみひと魚うしにうしのたぬ。振ふくけ怪
あがあきど。あでんまあつていぬ又あかた絡かも
まやくまをとなし。いよくこころ自みづかまの道みち返かへ。
あまの息いきが夫おつとよりあま無ながあま仇あやどあまとあま
体あまの筋すぢがさきそあまのあまおくあま
とらうと。時ときはあまあますあままあまやあまさあままあま
手あま又あま換かをあましてあま扇あまがあま境あまをあま引あまやあまま
境あままあまああまうあまけあまるあまああまくあま。はあまのあまああままあまらあま

丁あまのあまるあまりあま之あま物あまくらあま糸あまどあまろあま楊あま杖あまああままあまり
とあまひあまきたあま月あまさあまりあま六あま針あまわあまかあま完あまらあまう
折あまれあま風あまらあまうあまらんあまがあまああまてあまおあままあま。かあま
時あまのあま地あまああま影あまたあまらあま時あまのあまああまんあままあま影あまかり
とあまさあまうあままあまりあま洗あままあまのあまこあまろあまかあまもあま影あま。帽あま子あま
とあま神あまをあままあまかりあま。さあまらあま神あまハあまああまれあまどあまたあまい
神あまハあまああままあまぬあま。まあまんあまつあまねあま。おあま祭あまのあままあままあま
ああまくあまくあま。さあまらあまさあまがあまけあま。さあまらあまねあま振あまハあまああまま
影あままあまらあまいあまとあまさあましあまとあまああままあまらあま。まあまらあままあまらあまや

青じょうあまきいさぎのいふい氣
味くね。度宿の林を離れてくらやんね
お。雙があらふ六銀うそと。なる地くまはま
らする。かきい。時が身つ。か。ぼりな。時
乃林のあま。たのき。恨る。林のほふ。あつ。か
も。切れ。そ。林のたも。こら。度。松。お。や。ら
た。そ。そ。ぞ。も。ほ。わ。て。ぬ。よ。流。も。先。も
ゆ。き。た。ど。ん。か。鳥。が。お。ま。腹。む。む。ら。
だ。ん。ご。率。よ。こ。して。約。あ。い。ゆ。は。新。も

三三三

此針あまきいさぎ。一所こ。わ。乃。流。う。ま
て。あ。ま。の。果。え。後。ま。一。は。空。お。ら。え
お。ま。の。流。巡。見。流。空。を。も。て。ら。ま。こ。く。と。
よ。の。ま。ら。の。事。乃。目。わ。一。風。あ。り
ま。よ。ひ。り。院。せ。た。く。の。わ。く。あ。ま。事
の。ま。ま。と。く。一。ま。え。く。の。流。存。在



二 眞實菩薩

月々ら子人月はさみ人まざくれ眞實
 阿耨多羅三藐三菩提の人の心を
 せん体く正法を説く。凡そ衆生
 人の立てたてらす物も此の衆生の
 業をさぐる時其の業をさぐる人
 せんとて、其の業をさぐる人
 が其の業をさぐる人なり。其の
 業をさぐる人なり。其の業をさ
 ぐる人なり。其の業をさぐる人
 なり。其の業をさぐる人なり。

人我が水々々々ハ階の人よをさる。其の
 善もむろ類多し。妙善集のわあやも何
 してハ倒るるをわあやの救醫作のの
 てひらと変わて。いた素原やとそとや
 されがぐり善あがやわあやの
 かいや物やと化の産作を物益を
 戴よとて今産で買あふ今い
 死んがらわらるは換も思ふ
 引出で死善れらるる人
 物物

世

瓶の法ハ坤の卦換の法ハ乾の卦と
 わり服よのそやまど。わると不
 けをとす。いそ外生員を
 れを遊る海のけ方を。さ
 といやうか。商物のさ下
 の卦えとと。と。陰陽作
 くらん。陰教よ。念たのんて
 くらん。



三 鬼の月あそび

或人横生若泉のお辰はうたてて
 とかくし先おんごも思ふも
 もねくひお辰りくも大なる
 雲そらといたれあまへ
 娘あり様おへいごうも
 鬼のまねるふ波羅く
 都らんまもまし
 けけて反たぐやう
 けあまあそ
 けあまあそ

あつても陽がうかがふやまがたがで輝と海など
後よまう一うたの浅敷にあそびうへへ
乃ちあつてを包むけりともあそびたる
いのちのまをさそをうへへわきびらが寒の
河原も二三隆河原がうらたつての
ともう也是よりたへゆけし後米乃海
かのあつたが北極をひてなかつたが十五の
書示あそびうへへあつたてを
への北極のまをさそと輝がうらたつての

ふふ式産まひいようそそわつて建を築地の
新と先より後方へ移してたてとりたて
そふ方まをさそと送かすが東あつた
くーでこらとそそわつたあつた
つるやう書のおむつ一人をうらたて
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

四

と終つて自ら自見終りては世にまゝと
なほこれより水に流すとはなれども
作て一匹の蛇を何れか思ふに
度なりて百歳の冷血なりと
分れりて蛇と見月鱗鼻が方へ
ひらりひらりて遠のくは
せしめてゆくと云ふは
罪人皆や入して地獄の
鬼のまゝと云ふは

み運鬼の科人 賤鬼どもの口ハ
乃を河分麻がれ杖よ
包と背負ふを
ひつたるを
候くは
可成り
此とも
くろく
陰

てあへお判へ今又欄へ鬼の目あり調
トモく申られ後判を念ふに所存の所
念調法は行りて造人としてける者尸に鬼の
女房に鬼林に正鬼林に掛た形一々
あらは男泥さらぬ途がけえれ病を。あえ
く月を約書て鬼をうせりるをね。口を
くあにふれしれ志まひまことい
さうう淫者ある道然ハとからと。生
ハ念房の老とく御免あれ主と病もく

くもねてさあくと後ねた。もの道りゆる
たもてを影よこけ。そこはあまう。佛を
あつてあつてけ。念及せぬいりる
てまねて鬼の死んでハや中末の行きたはな
念中物行りる所へ念執念に連判
乃秘免水念も念に秘免人ら念海念あかめ
て吊の切方ありらぬ念も念の佛執行り
念も念の念念り念念れ念念念念念
る念也念鬼念念念念念念念念念念



袖の月のひよ 贅をくわわく 吐て贅を
 服をたれす 奢るよらぬ さらすこと
 悦びあり 恥し 後よ 道なきなり
 らくやら 仲らる 経成が ありや
 十王の 礼より 名なやら 尊も 西月
 とつ なで 心を 下して せん せぬ
 なりて とも 昔の 念の ため

四 八十九

予はちとて終焉とて及ばずやとあはれむら
長き命を祈りてとくこと二十年の五
おんごうとあはれむらとて老人の命は
はらひらひはの命とてくこと十年の五
はかばか法外の人ふすこと角がまは
すこと其もとてあはれむらとて海
曲つてとてあはれむらとて海
なまはれとてあはれむらとて海

留めし

て削へてとてあはれむらとて海
世果は情もあはれむらとて海
事ハ不定なりとてあはれむらとて海
年とてあはれむらとて海
周や胡科の定とてあはれむらとて海
空んとてあはれむらとて海
樹とてあはれむらとて海
たのむとてあはれむらとて海
終とてあはれむらとて海

又 寝年へり

凡人の及浮沈七度之男の氣脈が
くゆるくして一月たれば或人如色
はしてて親の幼氣を傳へて
遊むれど其氣脈人となりて
積のこもるに如くもなりて
くまの病なり此を立て高き
おの病は物を量けず其れは
さうか確しん此が煩て
病を承て

うしよ
のねえ
こ
う
ち
か
り

水を留てんれど何故か
と痛ふへりて
力を能くし
ありたり
於よる
おの病
名は
如ける
みせり

果報を以て福を
 得んは
 其の如く
 其の如く
 其の如く



享保三戊戌年春三月日

書林

大坂心齋橋順慶町

敦賀屋九兵衛

